

ches  
1  
2  
entimetres

7  
17  
18  
19

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak  
LICENSED PRODUCT  
Black

Blue

Cyan

Green

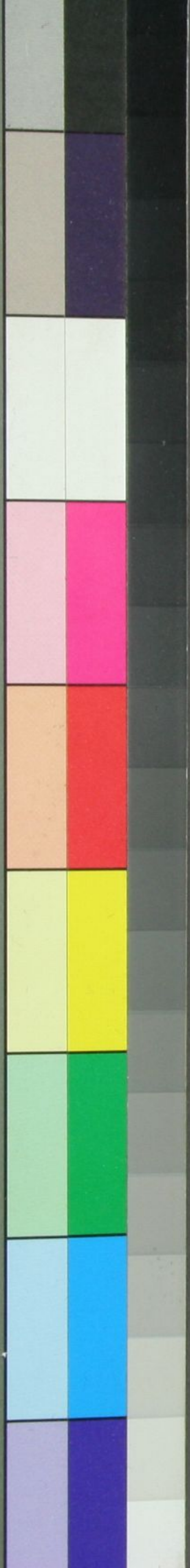
Yellow

Red

Magenta

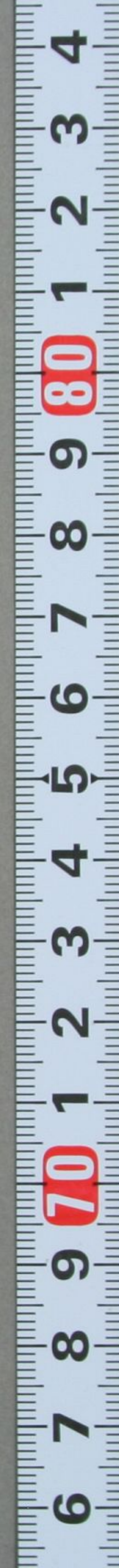
White

3/Color



Handwritten Japanese text on the cover, including characters like '文庫' (Bunko) and '18'.

中村俊定文庫  
文庫 18  
684



80

70





序



芭蕉翁は俳諧正風俾を著せられたり  
 貞享乃冬に日試始とて元禄の録を  
 考へ終るまで二百有年其は是れ何れ  
 の人かそ是れ中よ葉巻のひき手七部葉と  
 号せり其のやうにても附るの意味は  
 深長なるもたはすの解をたぬの人を彼  
 和はう玉を光をおほくくくく中意なり



史簡の隅にこそと徒よの魚の業の解す  
も何んか——予は道も情も——  
まをまての業を志すは虚作の言さうを  
多よの業の——壮年の以て言はれし  
をせめ教年たり飾に破成破成の間に  
おもひてはもとて古の業守りし——  
世を探  
世を方成態——  
古業の終り——  
千うの  
しをを白解——  
袖中よせ——  
ま或人語

と様なり——  
世のほけよとるも頑僻の解  
な色を懸け業よかると懸けの眼を  
はらひもはらひの愧をたす——  
たしむるもよみぬ——  
世の解——  
こはぬも  
三書むのす——  
先類が業もよとて破成道也  
を讀まけ——  
はらひの愧をたす——  
泉如山の業も  
懸け業  
はらひの業も  
懸け業

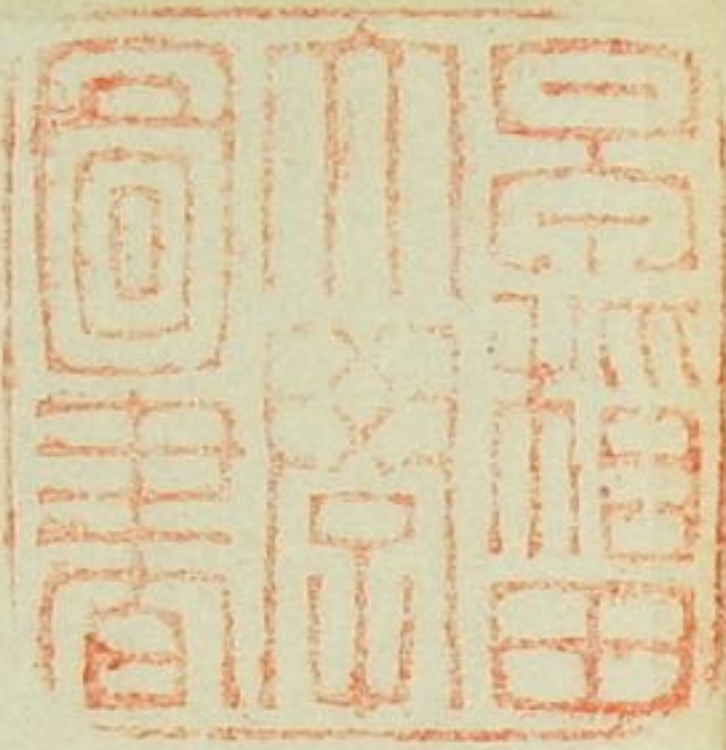


やうに對し先冬の如く彩を仰し部木  
種と題しこ目席し橋木と刻し  
幸しぬ様みおふの互と誤の始ふ  
終る右様君子補ひ多ひてんや

寛政乙卯夏且月

虬戸菴

素綾編



冬乃日

尾張五款仙



美しき世に逢れ雨を降さるる花の影を  
しのほらししれもあつらひのまじりし  
情傳人あつらひのまじりあはれむし  
狂言此世に此國を多しりしと成ふ必お  
毛ひおろし中傳

芭蕉

狂言このらし乃乃ハ竹森よ以る也

比白野原らしの記行よ名僅を以るこの  
御味すすし何事と眞享元年初冬はれ  
はる雨よ降さるる紙衣は風よも吹さるる







よも東のよりの神のいふおかしき言のたのしみ  
水乃冠らよとていふことあり

かしら乃衣をぬき赤る 重五

河原の川前敷運乃るるまきの中よ赤る  
うしとて衣ぬき赤るありなし

朝鮮のほろりすくふの白ひねさ 杜玉

時るるく人替すことありしとて朝鮮の不  
そまき白ひねさしとて赤るは朝鮮の  
の余性もあらし

日紅ちの葉しくよ時をよ赤川 正平

いふ朝鮮乃地まきとて赤川の白ひねさ  
とて赤るは赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川  
乃とて赤るは赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川  
赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川  
赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川

赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川 野水

赤川人の向く赤川の志乃時をよし鳴呼  
赤川中秋のまき中とて赤るは赤川とて赤るは赤川  
て赤るは赤川とて赤るは赤川とて赤るは赤川



海にこしれく船ヲを控辨乃る中すや平  
るうせく後る房まはるが朝の雲の  
が面平是難哉うすう人の説法得る身  
なれん其の中一の豊なる後毒すん

髪を中する説思ふみれ保中 芭蕉

是の蓋儀乃る説書平乃付おと見申し  
思ひく難哉もやすと仰り申さるる  
中將二条乃右のやうに申すはしる何荒  
淫よりつゝ右のまゝに申すは平に  
難哉切くうり書平難哉がやと申す  
若る中一好むてを奇物んんん書書の方

お下り申すも申すはる無名抄に在又は白紙唯の  
店元の人乃好むもやすと申すは還俗すも  
及しと守れを不義のしゝ蕉門の不度  
哉

く月をのれ難面しと説法なる言 重五

富子の心中たてれ切し如乃驚とる驚く二世  
うけし中も申すはる申すはる申すはる  
人眼は愧ふひ申すはる申すはる申すはる

消えぬ卒塔婆のよすく位 荷兮

乳波をぬり控すはる申すはる申すはる



昔々、我教母が、候なり、  
見知し、その、  
塔、  
懐、

因 西乃、  
芭蕉

眠、  
見、  
我、  
は、

何、  
杜、

あ、  
一、  
物、  
一、  
清、

田、  
為、  
翁、

あ、  
し、  
う、

芳、  
野、







源氏物語の式を對する。そのうち、源氏物語  
たうりつひに、しこぢう、鼻かむ、源氏物語  
源氏物語の式を對する。そのうち、源氏物語  
鼻かむ、源氏物語の式を對する。そのうち、源氏物語

系物より、源氏物語の式を對する。そのうち、源氏物語

折哉乃、志、式、轉、し、こ、ぢ、う、の、中、み、く、歎、く  
人、の、足、踏、く、ま、ん、ん、

今、そ、恨、能、矢、式、を、お、の、こ、志、為、分

如、美、部、の、中、み、く、能、子、た、つ、の、子、と、志、歌、の、何  
某、も、お、世、に、式、道、を、お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢

式、を、お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至  
あ、い、ひ

盗人乃、紀念の、松、吹、折、ま、き、也、芭蕉

矢、を、お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至  
お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至  
お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至

志、を、お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至

字、の、終、の、は、お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至  
是、も、お、の、こ、志、為、分、と、い、ふ、矢、と、い、ふ、人、の、及、至



すまやのの 礮う并宮此は海ありの宮事すのり三  
所西のりく道より水に〜七時〜ありもさ  
て〜無名抄より入之付きて〜其後宗紙の款  
ハ礮う并の條の末とひ休くはら

三 ぬあ〜〜 礮う并宮此は海ありの宮事すのり三

後人連奇のり神は海あり此は海あり  
そ〜境系〜あり海あり〜も宗紙のむ〜  
作〜〜 三後〜〜

冬 枯け〜〜 唐 荳 野水

はあより〜〜 冬 枯け〜〜

と〜〜 傳〜〜 の首〜〜 した〜〜  
流雲 獨志〜〜 の敷〜〜

志〜〜 碎〜〜 の骨〜〜 何 杜 必

首の〜〜 化〜〜 した〜〜 の骨〜〜  
志〜〜 した〜〜

鳥 絨ハ 胡 子 團 丸 子 重 五

骨〜〜 何〜〜 骨〜〜 何〜〜  
ハ〜〜 鳥絨の甲〜〜 何〜〜 胡〜〜  
用〜〜 何〜〜 何〜〜 何〜〜  
山鳥の龜ト 敷〜〜







蘇や木様やとわさしあらん物なりん

牛此詠とぬらうおまの夕暮る子 芭蕉

既巻紙好今有り白ひく牛よあそく道途  
せしんれく成思ひわく牛はあふ白ひま  
らん或人此袖中集ま今若の吟とく出  
るお歌りま

我の思ししと成りしや海よりん  
さよあつとくあつといふら

今若天智天皇の末乃皇子とつて後王末考

善る中勢のくを成りてくふ 杜公

牛の詠事あつとつるよりの室は八海の侍なり  
子梅ししあつとん室は下を佐野の  
北大平山乃林下此唐大建中成りて室は  
山宮大明神ハ亦此室嗟那雅ま室三神の神  
なり無戸の里ま入く焼失路あちくは中  
に空あつとのさあしあつとりの室の成し  
はとちとつとつや上は其さよ思はらんは  
成りり吟ひしとあつとりの室は成りり  
終つとる真成りてのやま焼く門は  
よりこの成りし成りて人のあつとる  
さつとる思失ての法も其成り終  
成りて備しとを











澤菴和尚の歌

あつしんかか〜ぬまのたのまを  
めつしんかか〜ぬまのたのまを  
は歌れまゝのまをひ給らん

霜 下 来 ぬ ん ぬ 阿 乃 不 乃 食 杜 必

あつしんかか〜ぬまのたのまを  
めつしんかか〜ぬまのたのまを  
は歌れまゝのまをひ給らん

野 菜 ますしぬつ ぬ海蝶比ぬおきえ 芭蕉

あつしんかか〜ぬまのたのまを  
めつしんかか〜ぬまのたのまを  
は歌れまゝのまをひ給らん

野 菜 けき〜車 ぬお 乃の 若今

あつしんかか〜ぬまのたのまを  
めつしんかか〜ぬまのたのまを  
は歌れまゝのまをひ給らん



あつろ乃をまき足家のをし

磨う月移り羯鼓試鳴すらん 重五

車よあまうし遊りあす磨上人の海あまし

森むをまぢる 貞徳乃 富 正平

磨と山より貞徳と又磨と山より貞徳を  
松永彈正の孫より連歌よをし九條玖玄  
乃 貞儀を傳はりて花の中より自也頭磨  
と磨し隠者乃富貴より磨かよ五園はあ  
莊よりしと磨り梅園松園若菜園村園芦  
北宮家の上は白雲園北也磨り

雨あゆる海島の田螺ほりて 杜函

芦乃宮家北泉あり海島の浪よりあましを  
吟移すゆずりてし融の大丘六條河原あまし  
乃し不ぢり試移し隠し松原の浦より以を  
海あまし鏡せしな中奥よりも或御館あ  
る泉あり井の此地試移けのまに定法のま  
地飛りての以或の御隠館のまのまぢるとあま  
た貞徳の風流をまもりしし六通音より  
しめとよむししと磨りてめと磨りて

奥が素はしとや試あまみれ 野水



田舎しの如月此を賦事と思ひよき人  
情の移しみちのれくこしと思ひ出さ  
出ほしなしくあり

系中ありて語を従事なる男 若子

真乃如月賦なりとふより陸奥唐の傾城  
を見せしと田舎客の言葉なりしと本  
まをて語を合ん固より殊に従事なり(影)  
の中よとあるこの歌は二月の何の文ありしと  
あしひやなんといふ賦事なりしと若子  
歎くさる余情深しなる唐詩五絶長  
二十形の白もあまひあしありし

縁さるり多けり乃恨跡しし 芭蕉

従事同士のふより幼をほいひ名つけの中  
形りしし女のわづらひあまひあまひ  
過る責らまきし左縁好とありしと若子  
情さるりあり

口あししや痛賦ちさるり力やふ 野水

縁さるり力つけの言より親縁の年あまひ  
乃さるり見入る鏡よ向ひ家あまひ面中の痛  
折恨ちさるりもまきし縁をさるり  
情歎く余情あり



翌二日ま歌平首おろせん 重五

口おしとるより歌乃首の痛とえぬし  
此首おの歌よあきつて各く号まこ心  
成はくせしとるも亡君を思ふよ向れ  
打擲ししと翌ま歌の由縁と送りん  
飛まらん

小三ちよま歌とせおろし 芭蕉

歌よ首送らんより凱陣の歌向軍中  
の歌之ち小ま歌とる大将乃傍去り  
乃若衣を大ま歌つりて看は視ふ

まし

月ま送る花牡丹ぬす人 杜玉

名恋花をらん日まぬすまんと思ふ人の  
を給しにと青を淫乱舞の太は  
此月を花よ送るし月送るま思ふ  
らん

隔羽のかかりを破 壁落こ 重五

鞠場は色牡丹の咲可無人の  
ハ破壁落こと伝はるる  
とんてらん



出川くゞとのと増蔵新形 町 着分

鞠のわづり有大事乃つ安町る三の執而増  
新白伝余懐係し

ち河新此世とや辱のいり免しく 杜函

る此新より増を見移るひと軒燈の心珠得  
く人の身はく方とをやと大伝親しん鳴呼花  
のせとく形多伝お終よ新ひ衣胞紙飾いよ  
しと案の要するまゝ終の末は皆下くる此  
歳よやうもの現と朝のぬ歌夕の白骨と親  
志しある余懐甚感係し

禿いらら乃 夫入りかひやふ 野水

嫁と禿り夫れく或もやうく屋くあま  
の子と年比くく嫁もやうく人のあしつ  
うき又親負あうと愛うまゝと禿い費夫か  
公界のくうらまをひやすうんと志の懐多懐ま  
らひ

根第り餅すゆる室ほはう形る 着分

禿よ入く傾城の配餅室や伝新形  
飾るやうくく是蕉門ああまの節はは白と  
或もやとすへふもの











急せぬ砥 臨 濟 戒 師 芭蕉

母の赤き事(ある)よりいふより 餘命禪師此  
母と見せしむる(事)ありし漢土の(事)なり  
まゝ(事)ありし(事)や(事)成(事)る(事)を(事)機(事)成(事)持(事)衣  
し(事)衣(事)成(事)持(事)衣(事)成(事)持(事)衣(事)成(事)持(事)衣  
餘命の母(事)を(事)思(事)ひ(事)て(事)涙(事)を(事)流(事)し(事)て(事)眼(事)も(事)位  
つ(事)ま(事)し(事)し(事)と(事)世(事)人(事)云(事)傳(事)へ(事)傳

江湖風月抄大義渡之扁

濯足機先被熱瞞 黄金之義鐵心肝  
十成報德酬恩句 萬古一江風月寒

註曰

黃檗運禪師得道後忽思省待父母師任到闍中一  
婆子出問何處來師云江西婆云我家亦有子在  
江西多年不歸師因借宿婆親為洗足運足心誌  
甚大婆失記是其子次日運辭去於三里外說與鄉人  
云吾母不識山僧但母一見足矣鄉人報知其母女起  
至福清渡運已發舟一跌而終

禮滅公羽有頌畧之 黃檗稀運禪師臨濟惠照

秋蟬乃慮(事)り(事)て(事)る(事)ぞ 東さハ 野水

此白禪師の(事)く(事)く(事)大(事)悟(事)の(事)心(事)成(事)云(事)流(事)し  
ある(事)な(事)ら(事)し(事)ん(事)生(事)る(事)蟬(事)の(事)声(事)より(事)る(事)慮(事)の(事)心(事)成(事)云(事)流(事)し  
此(事)多(事)阿(事)の(事)心(事)成(事)云(事)流(事)し(事)る(事)心(事)成(事)云(事)流(事)し



藤乃實法つとむ常保とこほつちり 重五

源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちりの事系  
あゝあゝ源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちり

秋よりあきより源法とこほ常保とこほつちり 芭蕉

源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちりの事系  
あゝあゝ源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちり

おとりの典侍の局とくろ内侍うちわらひ杜公

山陰の源法とこほ常保とこほつちりつちりの事系  
あゝあゝ源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちり

阿波の内侍法辨はつぶん在りあり同年九月廿六日  
山居文治二年四月廿日ついで白川の法皇小原の御幸  
万里乃小路中納言殿御執筆也  
御製

おみゆのたのさとおみゆのたのさと

余性ハ世傳典侍乃局山陰の源法とこほ常保とこほつちりつちり  
あゝあゝ源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちり

三ヶ此この新野鶴尾長乃軍 重五

あゝあゝ源ささきの實法とこほ常保とこほつちりつちり











家母のつらさ  
霜女おのん

物も憂多し  
月も情も  
杜西

二人の男も思つる  
おれはつれも  
たのしみさ  
思ふ甘の門も  
物も思ふ大和の  
おれも思ふ大和の

夢の蘇れ  
角力ちあら  
芭蕉

情も思ふ  
蘇れ  
角力ちあら  
芭蕉

手ぬや  
海草(カ)情も思ふ  
手ぬや秋の  
海草(カ)情も思ふ

蕎麦と  
後系  
野水

秋の  
蕎麦と  
後系  
野水

新月  
雙六  
杜西

新月  
雙六  
杜西

紅粉  
賞  
花

紅粉  
賞  
花



刈入田植の言中なり農家ハ昼飯の事かし  
中よあまふお念紙賞まうこそ乃業めくそや  
下思ひしきよハ又伯りけみみち紙折るもの  
ししふくもるまよしとてふなすかし

悪ふる此業くく難成ゆり 居 野水

昔成爲くりそくお報為賞人の世成志  
浪人のこもり居くつりやう難成ゆり  
遠ひ付まうかし

命婦乃志より一葉なるとます 重立

浪人のありお報したは縁の命取ようはは

おもれなるとははのそやかし

海の子のまじ津浪のありよはゆゆ 若今

弟れおくりお成津浪の流の足糸なと  
くもるまうかし部く津浪地を辰雷乃与る  
みん得まうかし

佛の言くもる真ほとふ 高村 芭蕉

讃州志度の浦も因れ作平惠堂上人乃幼  
みく一心念佛れ行者とやうて成は志度の浦  
津浪もくはよ折あせある野乃後より惠  
心の他は疎陀佛成得るとらわすり何のほく



八割よりなるもの

縣名ノ係ト新見次郎ト仰カ遊乙 重五

莫の後より佛成得と云成設と云人あか  
中より稀なる云んししと云成設と云人成  
あつと競なす云んし

五形すみき此畠 六反 杜玉

阿のいあも大百枝のくしあん勢と持と此  
田畑中より此のくしあん勢と持と此  
し種ししと云の勢と持と此のくしあん勢と持と此  
芭蕉

み形美此生と云の勢と持と此のくしあん勢と持と此  
の啼と云を云んし

六 登れる此種あり 野水

きと云のくしあん勢と持と此のくしあん勢と持と此  
あつと云なりと云も云は云んし

七 崎や矢判の橋此と云の形 杜玉

るもの云と云矢判の橋成りて馬も保りし  
と我も保りなりと云の橋此と云の形  
神居の阿保りも保りしと云の形  
を平白此哉と云の形も保りしと云の形



一白のいゝまてとせりも此裁の原白乃哉と  
差別のまゝとすをよる

店屋の松或詠とありぬ 荷分

矢刻の若店屋の庵あのを中興せよと  
きし松のうゝ詠人もあまの松詠と  
毛其松の享保年中此松詠失ちしと  
可事ん其松の對しと詩より連他の  
贈りしとせん

すこししよの柴刈夫の伸はる 野水

店屋のより松詠とありし狂言など

上の白とえやしたるなと。妹のまゝ  
まふはのの海製衣の言もあはる

晦日或をく刀賣るやとし 重五

是會員者と見えし會員の通子或捨るも  
堪のうゝ年言れよよりなき重代は  
し刀或も賣るといふ松と電の  
風鈴の眼をよる

雲を狂兵乃國の笠免つらし 荷分

雲の轉しと名利或を松刀も賣る  
風流の道人とて遊るしと古人の詩



おのひびくもろのねふつひまきこりもくらす  
まじく。釋之惠宗之詩二

笠 重 吳 天 雲  
沓 輕 楚 地 花

襟子言尾片 神袂解く芭蕉

世の豊塵成遊人よふ人の向く其宗寂ふ好  
名聞遊里乃終ふ好の心く言尾片神袂襟子  
りけく不仙羨とて了歎身なきこし

仇人と襟袂拂ふ飲ほと舞 重五

言尾片紅袂襟よせんよふ言葉乃言より

袂袂拂もも思ふ人飲死ふ死せんあ  
白如情袂おし半し

采囊のねとくよる袂の守禪 杜玉

おの色袂の懲もも袂禪法よありくも遠のく  
屋身ぢらん休禪師よる威道ぢらんよ御對  
書よも袂の芥子二禪法

おまのめんもくほくおますの  
一免んももより悪とまよりりり  
又いつくしこりよもれらる道

法のをれをくめく袂の心もて宗袂  
是ハ禪入滅の除く大流をまき禪法袂説んた



澄羅夕花よふ花哉指揚路小竹とと連糸長枝  
JOURNAL

三日月此糸とくくく鐘の声 芭蕉

印とのけししは禪乃深あしとととと此  
何分三日月の鐘の深なるもあなまし

秋 湖のすくま琴かつあも乃 野水

西山の音月哉流東の晚渡成あく湖止の後  
舟言成あしししきくむさすさあ

意とく成ゆとくく競を競る 杜玉

舟無くくくあははは競成あししは教

あはははのくくくあははは

あはははのくくくあはははのくくくあははは

隣の意佛此あはははのくくくあはははのくくくあははは  
あはははのくくくあははは

新くくあはははのくくくあはははのくくくあははは 野水

あはははのくくくあはははのくくくあはははのくくくあははは  
あはははのくくくあはははのくくくあはははのくくくあははは  
あはははのくくくあはははのくくくあはははのくくくあははは

あはははのくくくあはははのくくくあはははのくくくあははは 重五



やみゆしほちのちもあふるくひのちし思ふ  
あふ見ゆししおちのちひく情あふん

こけきおふお綴あふちあふる入 着今

あふちあふちししあふちし西のちのちあふちあふち  
あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

西のちのち

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち  
芭蕉

西上人のあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち  
あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

其四

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち  
重五

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち  
あふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち



皇皇抄よふぢにほかどあきとあは上乃白此  
えん能修よあしあまあしん

人此化粧ひ況わ美 磨 零 荷兮

あぬ白の事なり鏡を白くさく  
いさくくりの鏡磨の對あし  
よあよりあまあまあしん

職人歌合七十一番持

左番通の月

おしあまあまあしん

おげよ月れあまあまあしん

右鍛冶の月

新ねあまあまあしん  
あまあまあしん

又ね遠歌

あまあまあしん

あまあまあしん

あまあまあしん

お 荆馬骨あまあしん 杜西

人のけいひあまあしん  
あまあまあしん  
あまあまあしん  
あまあまあしん



雀見新 月かすゝなりの 野水

荊子骨乃の意はわりのあるを後代に傳へしすの意なる  
卷し

風吹也秋乃日 鶴も海にや 日 芭蕉

意はくを伝へしす人を立柳先生等との付とん  
出ししあらんを陶淵明或九月九日无酒菊下徒然  
ト有ケル王弘ト云人酒錢贈ケルトワ。朗詠ニ王弘使立  
晚花前落白霜鶴沙鷗皆可愛は詩もくも二句  
乃余情見くゆらん

萩 織るは 市よあすは 羽集

詩人柳原の萩は織るはくを傳へしすを伝へし  
世市中織るはの意なる人萩は葉もくを絶し  
意はくを傳へしす人の意なるを絶し

賀茂川や胡麻子代糸や近し 荷兮

萩は織るはの意なるを傳へしすを傳へしす  
んを傳へしすの意なるを傳へしすを傳へしす  
くを傳へしすの意なるを傳へしすを傳へしす  
つる糸九月朔の年此日なりと伝ふの人や伝ふ

岩くく乃 解りあつかし の比 皇五

岩倉ハ鞠馬近天をくくを傳へしすを傳へしす



是姑の情よ〜お家お家の聲のきこゆる〜  
信もあし〜お家お家の声のきこゆる〜

思ふに布襦〜  
野水

なつたし〜お家お家の声のきこゆる〜  
なり

〜二十支〜  
歌 杜玉

〜  
〜  
〜

〜  
羽筆

人情の思ひ係きより〜  
附ありん

やねのむね〜  
芭蕉

たのしみ〜  
何となく〜

門さの〜  
重五

なつた〜  
む



血刀かく夢 月れくくおり 花分

つる花よりくく夢よりくくおり 美人の喧嘩の場  
城切ぬけくく我屋跡のつる花思ひやのよ歌し  
あつたはつた心誠なる仲成りしつる謝な  
らん

芳たけりくく平々乃 隆七川さく 杜函

是言原居乃 喧嘩とらんくく喧嘩おせの因ら法何  
某の新編の騒々 伽羅の下履毛白のくく善なる  
はなすし

冬 待り 細 三 あり 野水

此道おりのくくおし 秋の果敢 夢れくくお  
細く或は 待り 待り きたり ともくくおらん

華よ 匠はくくらの 懲 とすてれりり 芭蕉

細より 櫻のお花 幾やひくくくくくこの花  
城 凱 志 一 あり 謝 あり せん

僧 之 の い つ の 歎 冬 城 欲 羽 笠

花の歌 志より 先言 禪師 なるん 見 せし ありん  
坐 禅 石 此 色 屋 乃 ぬ 夢 の お 花 浮 々 何 城 事 持 ち け  
山 吹 の 派 々 あり 城 欲 を せ あり 城 春 々 あり けり  
あり あり あり 僧 正 遍 昭 あり あり 良 峯 の 宗 貞 と 申 せし



時好色并のありつり帝后の姿ましく歎みたる御  
衣被被御簾中在給宗貞けとらし奉致御答  
あし其附

山あきの花をむねししや後

ととくさの口をししめて

それより以来終り山吹花いつをと縁形くせりと

連信良物もも及く時

虚栗の

山吹や元言禪師乃捨衣本下

衣の醜醜ウツクシ山ウツクシ梅子ウツクシもく清るもたなきことあり

ふ 乙高溜くぬありや羽を洗ひ 着兮

白燕ウツクシ何をも係山吹の清浄乃地ウツクシ下栖ウツクシたる色  
え山あきの花をむねししや後  
もく清るもたなきことあり

宣 旨 賢 く 釵 成 鑄 造 重 五

清浄の地ウツクシとく天子の御髪首ウツクシ挿かんさしと  
鑄る執向今人乃及所に河く次

八十象成三川 見る 童母持 乙 野水

天子乃叙成流るる下より初冠御即位此賀とて  
諸國より長壽の人成撰百とく執向老若子あり  
此儀又喜く人の名書れ人を余性より及く時



中

中より初めにあまふたつてつる 杜心  
おれをききあひしむのこころもさかしくきりしは穢女の  
不孝の魂あまの遠方なる人の穢女と天帝の娘を  
河西乃牽牛と雲の舟をれり穢女もせの父母  
をも踏くやうしるもて天帝のうらみ中を避て  
天の川を降七月七日一夜あまの星は穢女をしりぬ  
と古文前集より入るは中紙新抄より入る人を七  
夕のこころ本気高言なりん

西

南より桂乃をきききり 時 羽望

是七月七日の月なりしは日の夕月西南にあり  
おきたり桂乃をききりしは花の喻なり

月十五夜はあまの星のこころはあまの星のこころなり  
るかみめき

葉乃 あまの星のこころ 木乃の音 芭蕉

秋葉は中葉のこころはあまの星のこころなり  
油紙のこころはあまの星のこころなり

賤ら家子 賢なをききり 皇五

葉の油はあまの星のこころはあまの星のこころなり  
撰集抄乃付も油のこころはあまの星のこころなり  
ききりしはあまの星のこころはあまの星のこころなり  
あまの星のこころはあまの星のこころなり



うた

西行

きり中流のうたをわたりて

うらたのうたをわたりて

うたをわたりて

家流のうたをわたりて

あつたうたをわたりて

とあつたうたをわたりて

釣籠の雲流法の日々 善 善

あつたうたをわたりて

たゆりあつたうたをわたりて

あつたうたをわたりて

鼓 多むけの 舞 慶乃 名 野水

あつたうたをわたりて

寅の日乃且哉 舞流法をわたりて

あつたうたをわたりて







水の方なきくく 葉向しやうく 羽笠

出陳の鳥跡はれし 懐くましと怨く  
あつらひ見送る 姿形くく

寐くく 夢を浅せむ 世をくく 杜玉

印くく 寐のまをくく 夢くく 夢くく  
くく 雨の音や 或満しく 夢をくく 夢くく  
はぬやく 枝はくく 夢をくく

其五

田家乃眺望

霜月や 雪のくく 夢をくく 夢をくく

前をくく 夢をくく 夢をくく 夢をくく  
白の 夢をくく 夢をくく 夢をくく 夢をくく  
くく 夢をくく 夢をくく 夢をくく 夢をくく  
夢をくく 夢をくく 夢をくく 夢をくく

みく の 朝 日 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 芭蕉

は ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ







意あつていし海と浪はしやうと澤澤 施行寺にまゝの  
同の御座新なりん

糸とくしきく 枝の花のなるる 杜風

寺の庭乃枝を根もろく 藤のたしん

葉ゆいしきく 枝の深る 風の色 重五

葉名よ糸深藤とくふる 糸とくしきく 枝のたしん  
枝の掛草は糸枝もあつん

短ふ道平 鳥帽子の廿五 十 野水

葉名の糸より鳥帽子の結とて入く 義仲の種

れ巴山吹の鳥帽子とて入く 海鳥のけりん

庭ゆ糸曾 能はるひのくす衣 羽笠

是ハ道平代も御大家とて入く 糸とくしきく 枝のたしん  
曾迄の糸名を深る 庭は結とて入く 糸とくしきく 枝のたしん  
あの短ふ道の奥より 糸とくしきく 枝のたしん

夏 涼よ山 橋よりは丸らん 着今

涼山の竹と結しきく 山橋の世はは糸枝とて  
つる白也なりん

麻 川とくしきく 歌乃集りむ 芭蕉







本丸の山ありてはては化すとも今も可強人  
乃亡記すや思ひ申して位況むさほありん

と念も甚をもちか志のつ先 昔今

青髪んさよりあより秀程塔とんく番の非人  
に騎ひきせはらしの青髪よ白髪よ若ら  
んとする金時ちん

泥のちん尾を虫銀拾ひ得て 杜心

貫ひ蓑の用紙ん替くあ田よりの拾ひ銀と  
包ちん

行幸よすむあきん歩らり 童五

羨濃の養老乃瀧なんとの行幸と見せし泥鯉  
城奉余様ちん

強よ思る年此大角豆のむもろく 野水

天子への改進め奉らふもく通年迄の甚堪  
くふ皓黒もく此のねれおもろくあるとん

萱家海をらに炭茶はく 白羽笠

垣越つたにさげのまうは坊院ん今回家白痴  
みしり市井の踏為あるとん今の旅集地も  
んてちん

茶囊尼の小坊ありし里にち群く 若今



炭窓の意動遙比並尼尊の住室ありん

形まらる蓮 実 蓮乃実 芭蕉

実より楳 ぬに見驚く 苺子と蓮との  
一対なりん

深さ年 飯臺のそく 月名 重五

蓮池より大寺の飯臺座敷はのちの月見  
足知し 多きありん

露 置く 瓶 瓶 やわやわし 杜 杜

飯臺を眺し 小飢 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶 瓶

寺傳ありん

的 材に家根 ぬき 多 片 底 羽 笠

瓶より山家の片底と今秋の末農半路に  
混材を別く 串指或ふ縄も治りて 塔と云ふ  
とら 家根も治りて 置きありん

豆腐 洗りて 母 此 喪 子 入 野 水

片底の家根 喪は家の心 喪は古代 殯と云  
りて 瓶より片底も遠くものなり 岡東よりありや  
ましと大和の國なり 上代の遺風なり 何なる  
貧家より云者 ぬれ 棺 棺 棺 棺 棺 棺



なり響井の吟物三層高起るも宜かりん

元政のよみ此袂もやきぬるし 芭蕉

母の喪よ入る人成原野の元政と見定まらん徳法  
師の甚母子孝信なる人なり母成信ひ才近山詩し  
紀りれ詩歌せよとこしし風流類者もく法華  
一流の師之行状の隠逸傳ゆも及く信

伏見木幡 鐘 志誠く川 昔今

元政の自在成あとする風流より伏見木幡の呪  
詠んどの歌成あしむんようめ花成く川  
とき他うふもあらん

古寺の

山寺のまこれゆふに成あつたれ  
つりあひひるがにむあらん

名師お男 猫とく川を捨るひこ 杜函

鐘華成く川黄成成成成とく猫するの華向成  
しこの猫とおもとととすうも婦人の捨るま  
情なるん

夫そふ砂の雪 掃を呼ぬ 重五

猫捨る情より志すすれきとて是所所の  
命婦れ仕丁成居す余情なるん



水子代秀白のむら 若やうり 野水

きき掃を鞠のわり此掃除と見替をね表末成影に  
是影の赤うししは白小對して贈答乃白ひな  
らん部うい換抄の巻白ひのむは松とまを  
ふふ茶 白ひはま 赤木うしし 羽筆  
是が紙綴ふ白うせと贈尾の揚りまらん

追加

羽筆

いかに見よやうはれおく半成うの藪

敷の人此眼成悦がしまふ面おくいふはたすてあ

降きしとも赤も吹降よ打とて紙つまきく思あ  
んとらつるうぢらん

檜火にあらる 枯るく 此 松 若今

此松年遠の望をわらうと打派の白く真州舎津  
やうより 蠟油酒乃 藪成余國(海)おす牛の十  
のまりも一連の遠く何成のくも牛のうかて赤  
はる赤を泊の度とん半は荷成遠なるくみ赤  
進六依の篠家よ芝すくしと葉くる下ふのま  
あまは松葉すくしひひ集り種つて酒の豆のなす  
うらあく体くふあうく檜のはらあやうあう  
春み出の望るうはうくまふも晴のんあうしあ







春乃日句解近刻

寛政乙卯仲冬

东郡小石川白壁町

衡山堂



特注

四星標圖